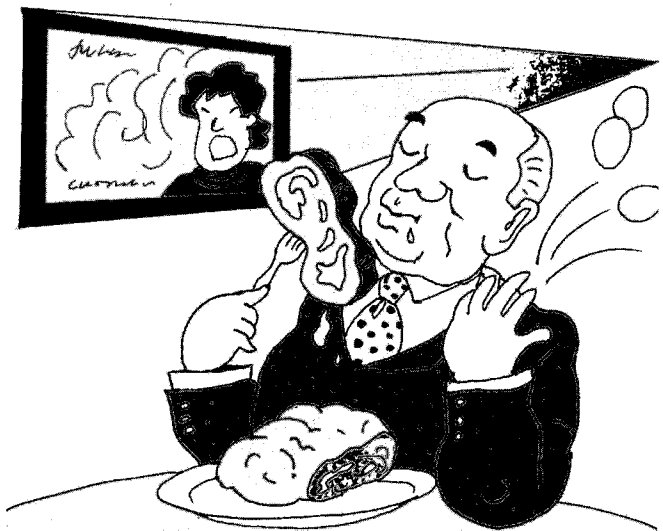


名監督ヒッチコックは卵嫌い 牛肉大好き人間

サスペンス映画の巨匠、アルフレッド・ヒッチコックは、一八九九年八月十三日、ロンドンに生まれた。父親は鶏肉や青果の卸をしており、敬虔なカトリック信者で息子を厳しくつけた。

学校での成績はあまりよしくなかったが、数学と地理は得意科目であった。学校を卒業した十五歳のころから犯罪に興味を示し、裁判を傍聴したり、犯罪博物館に通ったという。電信会社の広報宣伝部を経て、映画界へ入ったのは一九二〇年二十一歳のときで、サイレント映画の字幕書きが最初の仕事であった。その後助監督を務め、二十六歳のとき『快樂の園』でデビューを果たし、一九三九年の『巖窟の野獣』まで二十三作をイギリスで撮り、アメリカに渡って四十年の『レベッカ』から七十六年の『ファミリー・プロット』まで、生涯五十三本の作品を生み出した。ヒッチコック映画の楽しさの一つに、「カメオ」と呼ばれる、彼自身がワンシーンに登場する場面がある。なんと三十五作品に出演しているそうで、往年のファンは、彼を見つけるために何度も映画館に足を運んだという。



彼は鶏の中で育ったせいかわ、生まれながらの卵嫌いだったことはよく知られている。だから映画表現の中でも変わった扱いをしている。『泥棒成金』の中で、ケリー・グラントがホテルの地下にある調理場へ下りて行くと、コック同士がけんかをしていて生卵を投げつける。それがガラスに当たって碎け、黄身がタラーリと流れ、あたかも血の流れを連想させる。

それでは、彼は何が好きだったかというところ、ビーフステーキ。毎食ステーキでよしとするくらいのが好物だった。一九六〇年に来日したおりに日本料理屋に招待されながら、滞在していた某有名ホテルのステーキが欲しいと言って関係者をあわてさせたほどだ。

また、インタビューで「どうしてステーキばかり」と尋ねられて、「スマートでいられるから」と澄まして答えたのもこの時のことである。